刀池古窯跡群

調査の経過　刀池古窯跡群は、常滑市に近接する知多市大興寺の丘陵地帯にいくつかの支群にわかれて所在する古窯跡群である。現在まで数回の発掘調査をうけているが、今回は知多市教育委員会が1985年に発掘調査した地点（「愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅵ）」では刀池古窯Ａ群）を、愛知県企業庁による内陸用地造成に先だってさらに面積を広げて発掘調査した。

調査地点は、丘陵から西の伊勢湾に向かってのびる小さな尾根上に当たる。地形は、土取りや畑地の開墾のために現況ではかなり変化している。立木を伐採後、尾根の両斜面に沿って４本のトレンチを掘った結果、南北両斜面から窯跡が確認されたため、北側斜面をＡ区、南側斜面をＢ区として調査した。その結果、６基の窯が検出された。いずれも分焔柱をもつ窖窯である。以下、調査区ごとに記述する。

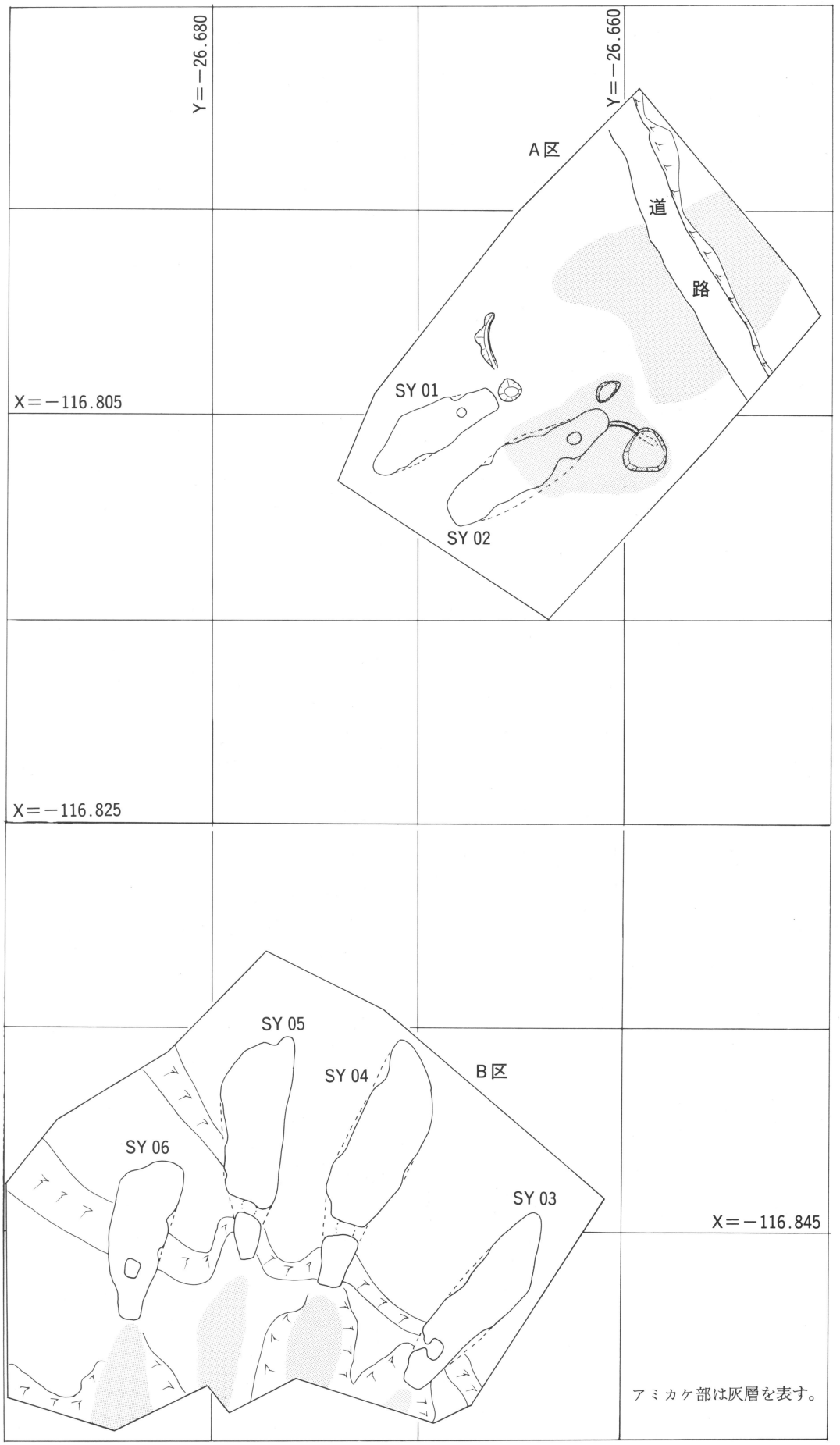
Ａ区の概要　Ａ区では、窯体は２基（ＳＹ01、02）検出された。ＳＹ01は、焼成室半ばより上部が土取りによって消失し、分焔柱も基部がわずかに残るのみで破損が激しい。ＳＹ01は1985年に知多市教育委員会が一部を調査した刀池11号窯に当たる。ＳＹ02は、残存長が９ｍ以上をはかり煙道部をやはり土取りで破壊されているが、それ以外はよくその原形を残している。分焔柱は約１ｍほどが残存している。

断ち割り調査の結果、両窯とも分焔柱は掘り抜きでつくられており、床面や壁面では補修の痕跡は確認されなかった。ＳＹ02では、床面下から山茶椀を伏せて並べた除湿・排水施設と思われる遺構が検出された。これは焼成室下半部から分焔柱に向かって左右の窯壁に沿って並べた茶椀列を、焼成室最下部で左壁沿いに合流させたものである。茶椀列の末端はそのまま細い溝に接続して前庭部まで伸びている。。

ＳＹ01、02の焚口前のかなり急な斜面には約50cmの厚さで灰層が広がり、灰原を形成し

Ａ区全景（東より）

ＳＹ02除湿・排水施設（北より）

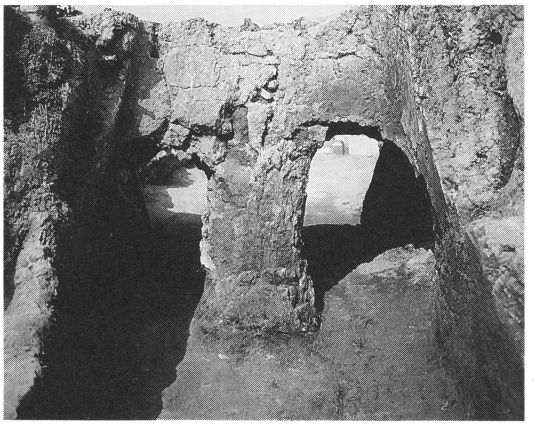

Y＝－26.680
Y＝－26.660
A区
道
路
SY 01
SY 02
X＝－116.805
X＝－116.825
SY 05
SY 04
B区
SY 06
SY 03
X＝－116.845
アミカケ部は灰層を表す。

第１図　遺構配置図

ている。灰層は単一で間層はみられない。またＳＹ02を覆うように別の灰層が広がっている。この灰層はＳＹ01の灰層とも考えられるが、ＳＹ01はＳＹ02に先行する可能性もあり、今後の遺物の検討によってその性格を明らかにしたい。

Ｂ区全景（東より）

Ｂ区の概要　Ｂ区では、窯体は４基（ＳＹ03～06）検出された。ほぼ平行に築窯されているが、焚口のレベルにはかなり差がある。いずれも焼成室上部から煙道部にかけては土取りで破壊されて、全形を知ることはできない。また焚口付近は畑地の開墾で整地を受けているため、燃焼室の窯壁は大きく破損しているが、分焔柱は各窯とも予想外によく残り、特にＳＹ04、ＳＹ05では分焔柱部分の天井まで残っていた。



ＳＹ04分焔柱（南より）

Ｂ区では、Ａ区のＳＹ02でみられたような床面下の除湿・排水施設は、いずれの窯からも検出されなかった。ただＳＹ04では、床面直下から直径２cmほどの陶丸やほぼ同じ大きさのさいころ状の製品が30個ほど出土した。これらは意識的に並べられたとは考えられないが、なぜ床面下にこのような状態でおかれていたかは不明である。

Ｂ区の各窯の焚口前は、Ａ区と違い緩やかな斜面となっている。灰原は、この緩斜面に細長く広がっている。灰層の厚さは、わずか10cm弱である。調査区の設定の関係で、灰原は焚口に近い部分しか調査できなかったが、それぞれの窯の焚口のレベルに差があることから、各窯の灰原は明確に区分することができた。

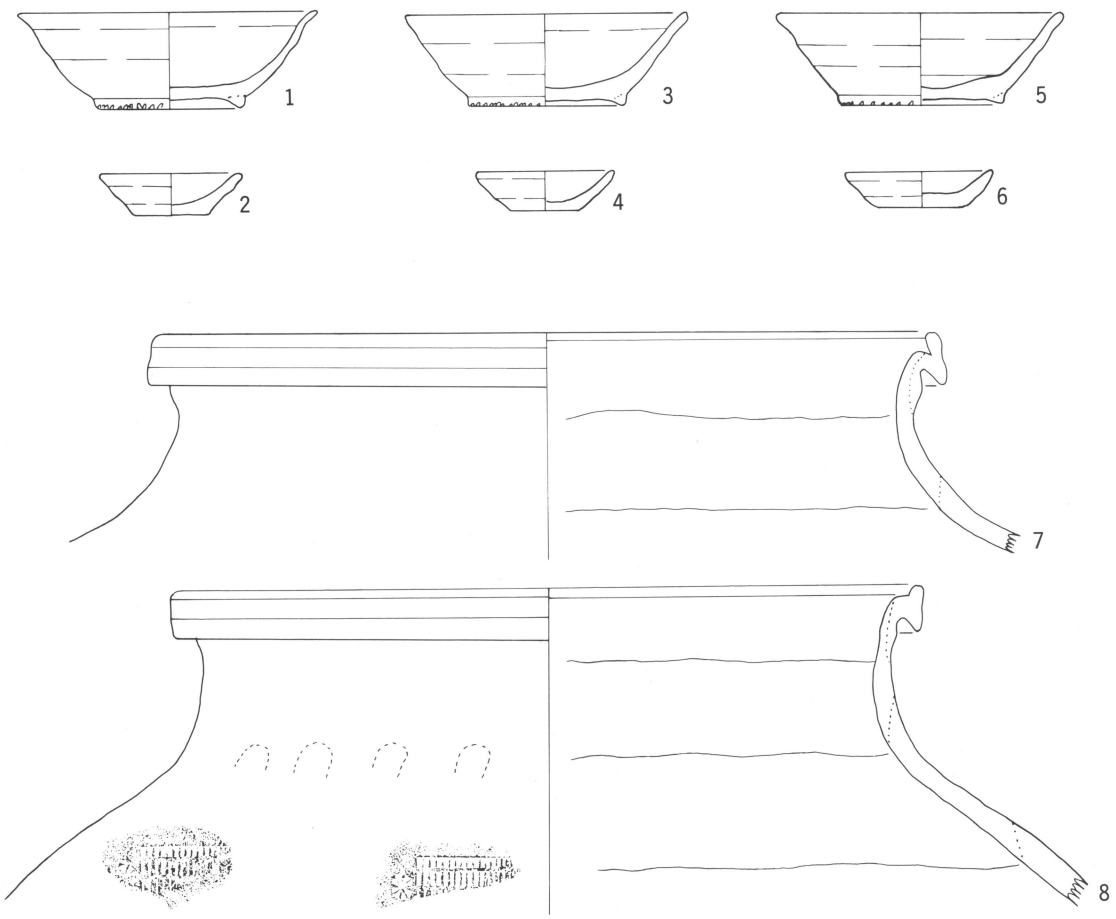
遺物　Ａ区の遺物は、ほとんどが山茶椀と小皿である。山茶椀は口径が15～16cm、器高が５cmほどで体部はやや丸みをおびている。口縁部は、薄くてやや外反するものと厚くて直立に近いものがみられる。籾痕をもち低くつぶれた高台をもつ。小皿は口径が７cm、器高が２cmほどで高台はついていない。これらの山茶椀・小皿は、12世紀末から13世紀初頭にかけての時期のものと思われる。他にはごく少数の鉢や陶錘がみられる。

Ｂ区の遺物は、甕が圧倒的に多い。直立する頸部をもつ広口壺に近い形態をもつものもみられる。４基の窯ともほぼ同じかたちの製品を生産している。口縁部は「Ｎ」字状に折り曲げられて縁帯を形成しているが、縁帯の幅は狭い。押印を施したものは少ないが、肩部に１列の押印列をもつものもある。その他の遺物として、山茶椀、陶丸などが少数みら

れる。B区の遺物は13世紀中～後葉の時期と思われる。

窯道具は、A・B区とも焼台のみ出土した。

まとめ　今回の発掘調査の結果、刀池11号窯以外に新たに5基の窯が調査され、知多市南部の古窯群の研究に新たな資料を加えることができた。また、遺物からみる限り、A区の2基、B区の4基はきわめて近い時期の窯といえるが、窯の位置関係からすべての窯が同時に操業していたとは考えられない。特にB区は出土遺物が属する窯が特定できるため、遺物の分析によって短い時間内での製品の形態の変化を明らかにできる可能性がある。またSY02にみられる除湿・排水施設や各窯の構造・遺物を他の古窯と比較・検討することで、工人集団の動きを含めた知多半島古窯跡群の中での窯業生産のありかたを考察する手がかりを得ることができたといえよう。　（余合昭彦）



第2図　出土遺物（1/4）
1・2：SY01、3～6：SY02、7：SY06、8：SY05